

San-ai

三愛会会誌 No.55

特集：出発

'68-1



若い力

—リコー・ラグビー部—



若さで蹴



秋の埼玉国体に御臨席の両陛下 (版權:朝日新聞社)



リコーラグビー部初出場, 晴れの入場式 (版權:朝日新聞社)

キック・オフ。
球は碧空を飛び、とらえて走る男。猛タックル。重なりあう男の体、体、体。その汗まみれの体臭、泥んこの四肢。

男たちは110ヤードの空間を、敵ゴール目かけて、あるいは走り、あるいは蹴り、あるいは猛然とぶつかりあう。それは若さと若さの闘い、気力の勝負、陸上スポーツの醍醐味だ。

リコー・ラグビー部は、日本の社会人ラグビー・チー

ムのなかでも、特異な戦績をもっている。現在、社会人ラグビーは関東だけで約78チーム、その強さに応じて第1部から4部までわかれているが、リコーは昭和39年春関東社会人リーグ戦に優勝以来、第1部におり、40年、41年秋の関東社会人トーナメントに2連覇、42年春には東日本大会で優勝した。また去る秋の埼玉国体では、予選の激戦を突破して、初の出場をとげ、この正月開催の全国社会人ラグビー大会にも、東京都地区で優勝、初出場がまっている。

対朝日生命戦(秩父宮ラグビー場)、力と力のぶつかりあうスクラム





ペナルティ・キック，
球はみごとバーへ



ゴールへ疾走



この正月の全国社会人ラグビー大会出場権をかけて、地区予選準決勝で警視庁と対戦。試合前のミーティング。



果敢なタックル



敵陣へ迫る



リコー、トライなる。
15-5で警視庁を敗り、
決勝へ進出



昼の勤めをおえてグラウンドへ



練習のくり返しこそ、勝利への道



試合のあと、汗と泥を落して再び背広に



寮でのくつろぎ

社会人ラグビーは、選手の誰もが職場をもち、働きながら闘うスポーツだ。そこにはプロにない、健全なアマチュア・スポーツ精神が支えになっているし、練習の上にも当然時間的な、労力的な制約がある。

リコー・ラグビー部は、監督、コーチ以下28名、高校や大学からラグビーをつづけ、ラグビーが好きでたまらぬ男たちである。昼の職場から帰ると、夕方グラウンドに出て練習を始める。植田主将は「ぼくらの悩みは、練習時間の少いことです」と言う。「それに昼間の勤めと、夜の練習の連続はけっして楽じゃありません。しかし練習時間の少なさも、二重生活のつらさも、結局は自分の将来や仕事への苦労を、のりこえる力を養うことになるでしょう。ラグビーはチーム・プレーですからね。」

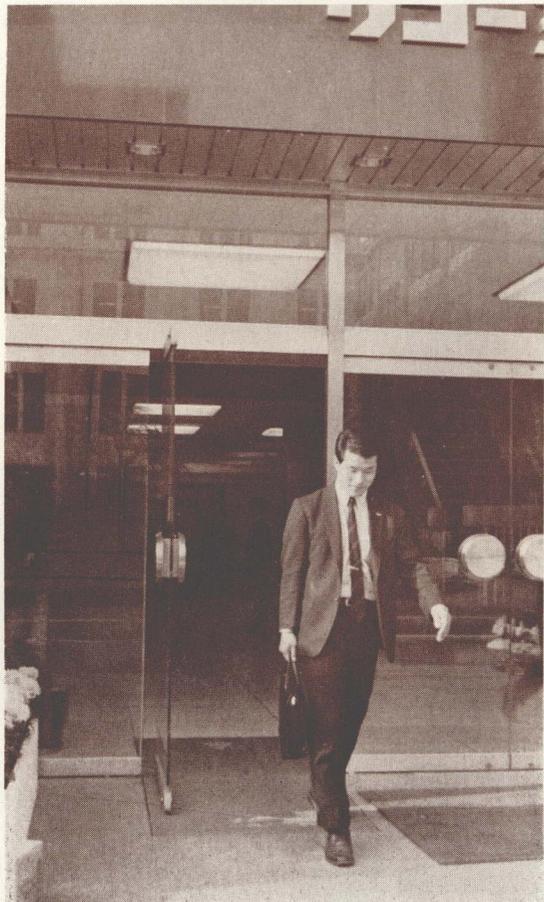


さっ爽たる仕事ぶり
(リコー・ショールームで)

彼らも会社という組織にいるからには、やはりスポーツより仕事中心になり、またラグビー部の選手は職場でも頼りにされるので、練習のために仕事を抛棄できないのが実情だ。しかしこれこそ、アマチュア精神であり、若い力の賭け場といえよう。

彼らはラグビーの虫である。彼らはラグビーをする以上、ただ試合に参加するだけでなく、勝ちたいと言う。

愉しみてスポーツをするより、勝負に力をつくし、相手を征服し、うち勝つよるこびが、人生や仕事にも通じるのだらう。



今日もまたセールスへ